

も引き戻してくるような心構えが必要ではないだろうか。（坂元）

絵本と幼児保育

竹田講師（保育理論の立場から）

マス・メディアとしての絵本という考え方を検討すると、いくつかの問題が提起される。

日本の絵本人口（一才半～七才半）およそ一千万人に対しても、各種の絵本やび絵雑誌がさまざまの規模で量産されている（その数は明きらかに調査しがたい）。都会の極貧家庭や文化的偏遠地域の場合を除き、大多数の幼児は多かれ少なかれ、絵本との接触をもつている。

コミュニケーションということを、「一方から刺激としてのことば（シンボル）を送つて、相手の行動を変える」と理解する、絵本は幼児に受け入れやすい具象性をもつていてもかかわらず、現実において高度のコミュニケーション性をもつていているかどうか、かなり疑問である。

実態を調査すると、幼児のための絵本の場合、ことのバースナリティに積極的に弊害を与える絵本さえ、きわめてすくない。他のマス・メディアの場合と異なり、幼児の情緒的不安定をはげしくひき起こすものは、調べたかぎりにおいてはごく少数にとどまる。大多数の絵本は幼児のバースナリティの発達にとってインディファレントであるとさえ極言できる。

これはなぜか。絵本がマス・メディアとしての量産性の必要から、最大公約数的な内容をもち、どの絵本もステレオタイプになる傾向がある。試みに大きな市販性をもつて二つの絵雑誌の同一

発行月のものをとりあげてみると、それぞれ雑多の場面から構成されているにもかかわらず、その内容も表現も酷似している。保育施設を販売ルートとする有力な数誌についても、ほぼ同様なことがいえる。ただこの分野では近來芸術性あるいは科学性を強調した独特の企画もあらわれているが、幼児への効果の点から考えると、編集者の自己満足に終っている場合が少なくない。雑誌以外の、動物絵本・乗物絵本などについても、一般にその特色を識別しがたい。

絵本がステレオタイプであることは、それを受けいれる側の幼児の個性を無視する。幼児はそれぞれ生活環境が異なり、発達年令が異なるので、自己の生活経験からそれに関心をもち、理解することが困難となる。幼児を絵本を与えたままにしておけば、多くはきわめて短い時間でこれを棄て去ってしまう。

表紙に対象年令を表示して、幼児の心理的発達を一応考慮しているような絵本や絵雑誌も出版されているが、最近では往々高い内容に低い年令表示をするものが見受けられる。これは編集者の誤解であるか、親の過大な希望に応じようとするものであろうか。

絵本の現状が、ことの発達に即してその欲求を受けとめていないので、これをそのままのかたちで幼児に与えたのでは、コミュニケーション効果に乏しい。そこでたいていの「教育的」な絵雑誌や絵本では、その扱い方を示す解説がつけられている。具象的な絵本に解説を必要とするのは一つの問題とも考えられるが、解説を活用することによって、ステレオタイプな絵本の、生きて幼児に作用する途が開ける。

幼稚園・保育所などにおいても、家庭においても、幼児にマス・メディアとしての絵本を与えるにあたって、まず幼児の社会的適応

に可能なかぎり効果的な内容と表現のものを選択しよう。「幼稚園教育要領」の公布以来、絵本における言語面が強調されているが、ベースナリティ全体の発達への関連が考慮されなければならない。

そして絵本を児童に見せるにあたっては、絵本の指向するところのものをその児童の経験の中に位置づけて、表現された場面を感受させ、こうしてそのベースナリティの中によりいられたものを現実の生活においてできるかぎり行動化するよう指導するがよい。このようにしてはじめて絵本は保育の立場から好ましいマス・メディアとしての役割をはたすことができる。

猪野講師

(編集者の立場から)

いろいろな問題はさておき、私たち編集者はどんなつもりで絵本や絵雑誌といったものを作っているか、ということについて、実際にやっている仕事の面からふれてみたいと思う。その前に、絵本には月刊絵雑誌と単行本のいわゆる絵本との二種類があるが、今日は、雑誌でなくて単行本としての絵本、ということで話しを進めたい。まず絵本編集上の着眼点であるが、竹田氏から、編集者が子どもの発達段階などを考えず無視しているのではないかとの發問もあったが、けつしてそうではなく、編集者も勉強しているということである。私たちが出しているものには年令によって絵本を区分し、編集の焦点をしぼっている。つまりその年令区分がはたして妥当であるかということはさておき、一応私どもが考へている区分は1才～3才、3才～5才、5才～6才という具合になつていて、どういう点に着眼して1才～3才の絵本を編集するについては、どういう点に着眼しているか。まず1才～1才半では、絵の理解が出来始めてくるから、絵本を与える最初の時期に当るわけで、絵本の主題、いわゆる材料といつたものは、児童の身のまわりにあって比較的親しみのあるよう

なものを選ぶ。たとえば、おもちゃ、動物、汽車あるいは植物といった非常に子どもの身近かなものを題材として選ぶということである。

つぎにこうしたものをどんな具合に表現したらよいか。これを写実的にしかも色彩もはつきりと、美しい色で表現する。なお、これらのものも一貫した動きとか連絡をもたないで一つひとつが大柄にそのままのズバリで子どもに受け入れられるように表現したいと考えている。それから、かかるかかる絵も、自分の知つてゐるものではないと、こういう小さい子どもはなかなか理解しにくい。したがつて、いわゆるストーリーものはまだ関心もしないし、あまり必要としないのではないかと考えている。次に造本の面であるが、こうした児童、とくに年令のひくい者に与えるものについては紙の厚い、丈夫な、しかも耐久力のあるものをということを考えている。

次は3～5才という段階になってくると、だんだんに一つのものがある程度まとまって理解出来てくるまでになり、いわゆる相互関係といったものが理解出来るようになってくるので、話の内容もだんだんと複雑化するというふうにやる。したがつて、画面といつたものや背景なども、ある程度複雑なものが入ってきて、絵そのものから、ある程度子どもたち自身でお話を引き出せるといったような配慮がなされているわけである。こういった具合に、年令区分によつて、十分に編集としては配慮している。

ではそうした配慮を一応まとめてみるとどういうことになるか、先ず、テーマの問題、絵柄の問題、それについている文章の問題、それら全体の印刷や造本といった問題になつてくると思う。先ずテーマの選定については、いわゆる世界の名作もの、それから乗物の本とか童謡の本とかいった、知識的なものを助長するようなテーマのものに、こういったものを先ず編集会議で選び出す。こ

の選出基準についてもいろいろとあり、たとえば、あまり小さな子どもに悲劇的なものを取り上げるということについては、悲劇的なものもある程度アレンジし、悲劇としてしまわざにある程度の内容を子どもたちに伝え得ればそれでよしとして、ハッピーエンドに終わらせるというように、テーマによつても、その編集企画の内容によつていろいろ配慮されているということである。

次に絵本は何としても絵が生命であるため、具体的で理解しやすい絵、したがつてそういう絵をかく画家の選択ということが極めて大切なことになってくる。画風の中には抽象的なものもあり、具体的なものもあるから、何か非常に理解しにくいような絵があると、その絵本そのものの程度が高いのではないかというような誤解や錯角を起こすむきもあるようである。あくまでも子どもに与える絵といふものは、子どもの心理状態からいっても、リアルでしかもその絵の中に動きがあり、十分に絵を通して子どもたちに訴えるのをもつてゐるといつたものである。したがつてこうした絵をかく人の選定ということになると、子どもに理解をもつてゐる人、すなわち子どもを本当に愛していっている人、かういふことをもつてゐる人たを選定することが必須条件になつてくると思う。

次に文章については、幼児にわかりやすいリズム感をもたせるとか、あるいは原則的に考えると、まだ幼稚園児は文字を習得していないから、文字は画面に必要ではないかという議論も出てくるのである。が、しかし母と子の話し合いの場をそこにもちたいということから、文字とか文章という点にも十分に留意してつけるというようにしてある。したがつて文字も、活字の大きさなど年令区分によつて大小それぞれを考慮してやつてある。

次に造本ということになるが、これは先述のように最も堅牢にし

て十分耐久力に耐え、しかももつとも安く読者に提供されるということが、私たちとしても望ましいことであり、また世間一般のかたがたも是非そうあってほしいと思っているのではないかと思う。

土屋講師（保育者の立場から）

絵本は非常に長い歴史をもち、幼児の教育上大切な役割を果すものとして、学問的にも実際的にも研究成果が發揮されていたといふことや、絵本は家庭、幼稚園、保育園などで保育者が相当に選択して良い影響をもつものだけを与えるということ、そういうことからついて安閑としてしまつたのである。しかしそく考えてみると、何とか刺激の多い今日、子どもたちもめまぐるしいほどの急速度で興味にあり立ちられていく時代であるから、地味に落ち着いてじつくりと子どもの魂の中にくい込んでいく刺激を持つてゐる絵本というものを、幼児教育の庭に大いに発揮するように研究努力しなければならないのではないかと思つた。

私どもの幼稚園としていることは、ただ今自由に絵本を見せる場をつくる準備として、各保育室に二か月分ぐらいの五種類くらいの本を二十と三十冊ずつとり揃え、設備していくようにしていつて、それから新刊のものを四と五種ずつ与えているが、その方は与えられる時に先生が読んであげることをせずに、先ずそつと出しておき、子どもたちが各年令層めいめいにどのようにそれにとびついていくか、それにその子どもの姿というものを土台にして、それを一日の流れの中にとり入れてやつてある。カリキュラムの上でそれを利用する場合も、準備としては、古い本の中から特別良い内容をもつものを大体、月別・季節別に集めておいて、その中から良いものを毎年くり返して利用していくというようにつとめている。

子どもたちの生活をみていると、絵本の中のこと遊びの中に再

現されてくるという場面が非常に多くて、とくに音楽リズムの面、劇遊びあるいは自然觀察の面、生活の模の場面などが愉快に明瞭に再現されてきて、非常に良い影響、ほほえましい風景というものが多くの見られるのであるが、この頃どうかすると、その中に風のように入ってきて、それをかきまわすということが時々起つてくるので、それをどのように考へ、指導したらよいものかと迷つてゐる。このシンポジウムのために、私ども市川市内の園児の家庭約一〇〇〇人を対象に少しばかり調査をしたので、その母親たちの声を手がかりとして、私の考えたことを次に少し述べてみたい。

絵本を子どもが家庭でどのように見ているかの調査では、黙々とひとりで読む、ひとりで楽しむことが多いという答と、『読んで読んで』といってせがむことが多いという答とでは、後者の方が多かつた。これからみると、どうも絵本は読んで聞かせるもの、話して聞かせるものという考え方の母親が非常に強いのではないかと思われた。もちろん、字の読めない子どもたちであるから、母親と子ども一しょになつて読むということは非常に大切だと思うが、そうしたことばかりをくり返していると、結局うわべりな、横着な、考える力を失つたような読み方になつてしまふのではないかと懸念される。それ以前に、やはり、絵本は見るもの、見せるもの、子どもたちがじっくりと自分の力ほどほどに読みとつて、それから自分を自分で育てていくくというように、徹底的にそういう時代を子どもたちに満喫させてやるように指導してあげる方が、後だんだんと同じ本でも幾度もくり返してみて、眼光紙背に徹するというほどでなくとも、こうした読み方を身につけていくのではないかと思う。

次に、先ほどの話にも出たが、本屋をまわってみたところ、本屋

と名のつくほどの店頭には種類は非常にたくさんあつた。調査した結果も月刊ものを取つてゐるというものが、二十三種類、時々買つて見ているものが三十三種類あげられ、いずれもあまり俗悪なものではなく、母親たちの良識を物語つてゐると思つた。ただ、裏通りの小さな駄菓子屋の店とか、露店商人の持つてゐるものに、いわゆる赤本というか、これはどうかと思うようなものが見受けられた。それから注意しなければならないと思うのは、子どもたちの生活の中にしばしば見受けられる野卑なことばや行動が流れてくることである。小学生を対象にした月刊雑誌の付録に、何かいやらしい漫画が、何かざくざくな汚ららしい紙、暗い色とり、悪い人相、下品なことばを使つたもので、殺伐な筋が入つてゐるといつたものが非常に多い。このような漫畫本が家のあちこちに散らばつてゐると、それは非常に大きな影響¹を小さい子どもに及ぼしてゐるんだなとうことに気がついた。

月刊絵本の名のあるものをずっと並べてみると、觀察的なものとか、カリキュラムの順序とか、一つの筋を通したものとか、みんなその内容に何か特徴をうたつてはいるが、竹田氏が示されたものにもあつたように、図画とか文章とかがみな一般化されているような気持ちがして何か新しい感銘が湧いてこない。そこで五種類ばかりの本の一年間の統計をとつてみた結果、数人の先生は、どの絵本にも、文章の方も絵の方もくり返し使われてゐるが、他は相当な範囲に広く渡つてゐるので、出版社の方でもそういうことに非常に苦労されていることがうかがえたが、とにかく各絵本に何とかもう少し新鮮な感銘をもつようだ特徴を出してほしいと思う。

単行本の方も非常に多くなつてきて私どもが利用するのには都合がよいが、やはり先のお話に年令的なことを非常に考えているとの

ことであつたが、まだ私どもの手もとであつてきるものにはそういったものがあまりないので、もっと学者や実際家の指導になる信用できる年令的な発達段階を表わしたもの、科学性の要素をもつたもので子どもの生活にぴったりしたもの、製本の堅牢なものなどお願いしたい。もう一つは昔からあるお話の筋がだいぶこの頃ちがつて書かれているというので母親たちが非常にまよようになり（私もそう感じているが）このことをどう考えたらよいか、その方面の研究もうかがいたいと思う。

最後に私の試みた調査の中で大部分の母たちが切望しているのは、山と積んだ付録をやめてほしい、だいそれた景品の懸賞もやめ

てほしい、そのぶん内容を豊かにするとか、定価を下げるとか、遊びに役立つ良質な付録を一種類ぐらいにしていただきたいものだということである。なかには有名な先生がたの名前がずらりと並んで監修者として入っている。私たちはそれを信じて買いたいが、諸先生がたがあの付録を教育的に認めているのかどうか母親は判断に迷う。それで監修者の名前を信じて買えるような絵本をだしてほしいものだと母親は言うのである。

司会 最後に、現在、日本教育学会の副会長である城戸氏にまとめる意味で何かお教えいただけたら非常に幸せだと思う。

城戸幡太郎氏

皆様のお話は、マス・コミが良いとか悪いとか、その機能の面から論じられたが、それはちょうどことばの抽象性のようなもので、マジックにかける可能性が十分ある。マス・コミの機能そのものは非常に効果があるが、それが良い効果を与えるかどうかということは、その内容に関係することがあって、内容についてのつづこんだ検討がたりなかつたのではないかと思う。

それは、保育の問題にしても最近感じていることであるが、具体的な教材を問題にして、これがどういうふうに子どもに影響を与えるかということの研究が必要ではないかと思う。たとえば映画にしてもテレビにしても、さきほど「月光仮面」の話があつたが、あるいは「かぜの二太郎」とか「黒ずきん」とかいろいろのものがある。そうしたものを具体的な教材として、これをお母さんや保母さんが感じて良いとか悪いとかいうのではなく、子どもがそれをみてどんなふうに子どもの性格に影響するか、どういう反応を示すかというこの判断から、教材を批判していくことが必要ではないかと思う。

今は、こうした研究会でも、そうした具体的な作品を問題にして批判していくこと、今のように実験的実証的に批判していくということ、いまのマス・コミをコントロールしていく方法になるのであつて、この「マス・コミ・コントロール」ということの研究が、保育の実践としては非常に必要なことではないかと思う。

書物になると、ブックレビューや新聞などでは、マス・コミ、ことにテレビやラジオなどの内容あるいは教育映画に対する内容についてのレビューがない。これを一つ試みられると、コマーシャリズムに対するコントロールにもなるし、マス・コミそのものの機能を十分に良い方に教育的に発展させることが出来るのではないかと思う。

今後、この学会での発表もそいつた具体的な問題について皆様が批判されると、マス・コミもじつとしておれなくなつて、相当の反省をするのではないかと思う。

(各氏の発表概要は、会場校森重敏がテーブルを再生して要約したものから編集した。)